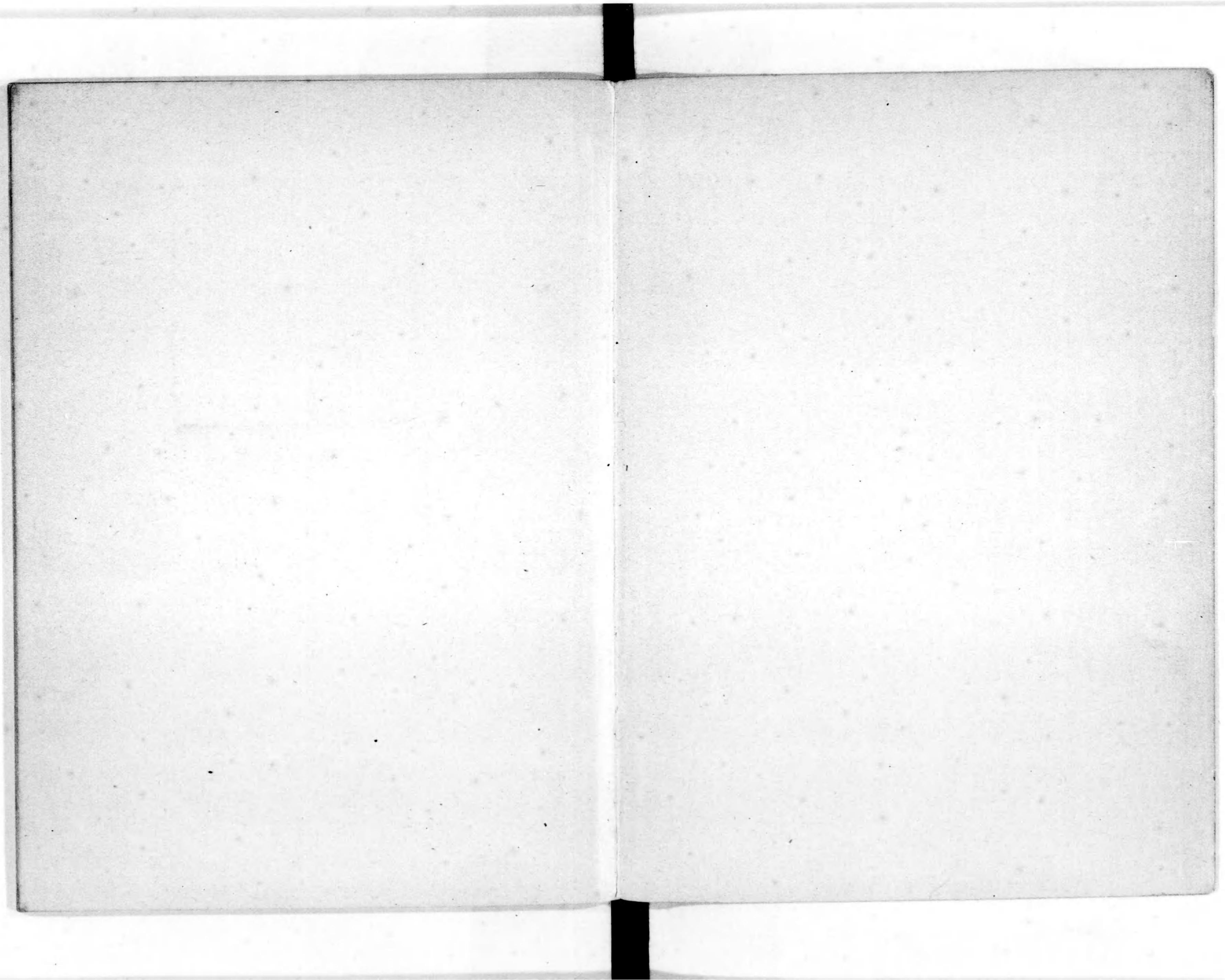


始



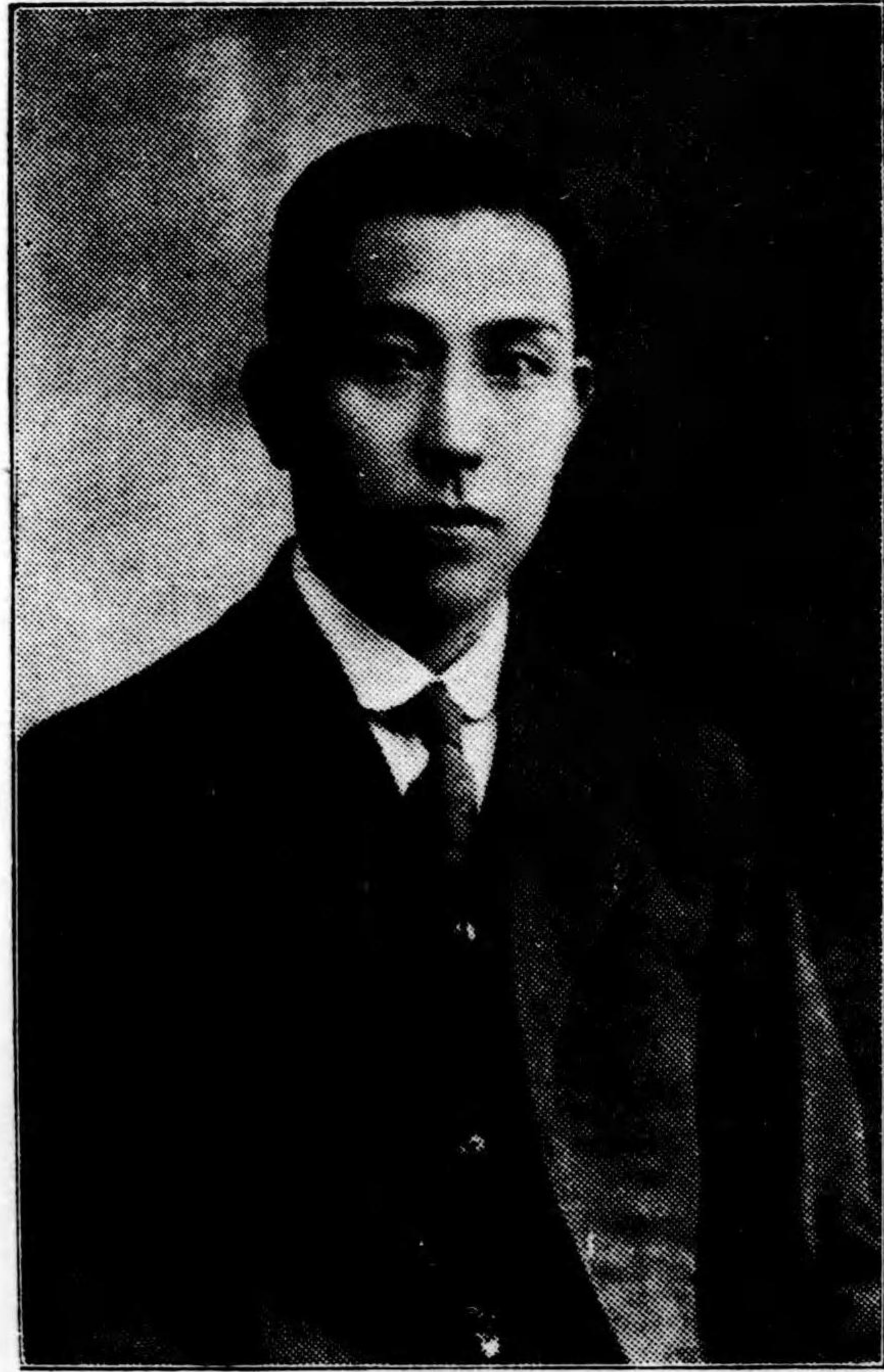


特100
385.



つ
つ
し
ん
で
ち
ち
う
へ
の
み
た
ま
に
さ
さ
ぐ





Vertical text or markings, possibly a date or name, located below the stamp on the right page. The text is very faint and difficult to read.

家の寥寂

著 郎 次 忠 田 黒



年 九 一 九 一

萩原井泉水氏序詩
兼崎地橙孫氏序文
遠藤清平氏序文
荒川吟波氏序文
黑澤武之輔氏畫

寂寥の家の序に代へて

嵐は、其のすばやい脚と強い腕とを以て
人間界を打ち従へやうと
地上を狂ひ廻つてゐる。
人間の家は皆なうつつ臥して
家と家とは抱きあつて、じつと
風と雨とにこらへてゐる。
それでも、ゆらゆらと揺れる寂しい
小さい家の暗い室に
ひつそりと座つてゐる私。

かよわい庭木は、ひようくと
救ひを求めるやうに呻いてゐる。
めりめりと物の毀れる音がきこえる。
恐ろしい物をも見ずにはゐられぬやうに、
僅かに、すかしてある雨戸の隙から洩れる
一線の光――。
月の光のやうに青白く、淋しく
然し、それが此家の朝を告げてゐる一線の光――。
その光を私は尊く机の上に受けてゐる。

大正七年十月

萩原井泉水

序

俳諧はまことなり、情の詩なり、心の歌なり。而もまことは眞摯に由りて得、情は親愛に由りて求め、心の歌は寂寥に居して之を探づぬ。自然靜觀の裡に其清澄を味ひ、人情敦厚の間に其情熱を感ず。かくして我々の到らんとを望み詠せむことを欲したる斯の境地を明に領得したるものを、黒田君の處女詩集、寂寥の家一卷なりとす。素朴と天真と、壯麗と崇高と、親しみと愛と、總べて本詩集に盛られたり、之等を包括し本詩集を貫きて切々人を動すものは是、黒田君の人格、即信念なり。枕頭悲語、何ぞ其哀音人を誘ふの甚しきや、これ、往時、俳誌層

雲に其傾向轉換の一暗示を與へたるもの、今尙我々の腦裡に新たなる所、

「夏山靈驗記」君が自然の天啓に觸れ其聲を心感したるもの、俳誌射手に於ける大作にして當時、俳壇の稱賛を得たるは論を俟たず、

「斷腸の賦」一篇其肉親を悼むの情、如何に痛酷にして君が愛、また濃やかなるを思はしめ、共に滄泣止まざらしむるの至情、是、君の句にして初めて接し得べき所、

之を譬ふるに、芭蕉にも非ず、鬼貫にも非ず、一茶にも非ず、まさに我々と共に時代と思潮を同じくし、最も親しく最も敬すべき若人の詩なり。

而も是、天真の質にして敢て當今俳壇先覺の推挽を蒙らず、

獨立獨行、群を離れて俳諧の大道を開拓し來りたる所のものなり。

今や、黒田君は俳壇新人の第一人者として其文、其句を以て我々を訓ふるもの多し。されば我々は君の集の市に出づる日を翹望すること久しかりし、

本詩集「寂寥の家」一卷は我々の渴を癒すると共にまた詩壇に對して貢獻するものあるを信じて疑はず。

大正七年十月九日

兼崎地橙孫

序

忠次郎君

私は今朝露につゝまれた銀座の十字路を下瞰し、人々の往來を眼下にしながら露を通して來るやはらかな量りがたき愛に満ちたる日光の恩寵に浴して居りました。私はこの早朝の日光に浴するよろこびと同じやうなるよろこびを、あなたの詩集「寂寥の家」に致す事の出来るのをよろこびとするものであります。

私は今、この静かなる森林の如き街朝日に飽満したる街、人の撥刺を待つ可憐なる街を見ながら、建てられんとし、又既

に建ちたる數多くの建物に眼を移しながら、私は行人を見る
と等しき寂しさとよろこばしさを、この一つ一つに感じたの
でありました。私は是等一つ一つの建物に寂寥と喜悅の高
波を感じるのみならず、私自身の家にも、同じく寂寥と喜悅の
粒々が降りそゞのを感じるのであります。

忠次郎君

私は此處に、寂寥と喜悅との言葉の意味する境界を明かに
しやうとは思はぬのであります。あなたは既に、私の云ふ寂
寥と喜悅とを明かに感得され、正しく會得されて居る事を信
ずるのであります。あなたの明確に體得せられたる寂寥と
喜悅は、私の前に寂寥の家一卷となつて、儼然と存在して居り
ます。私は寂寥と喜悅の開展に、詩集寂寥の家の完成に、偉大

なる人間の魂の發露に、祝福と祈念の聲をはなたずに居られ
ぬのであります。

私は寂寥と云ふ言葉を聞くのみで、私の體內にはたへがた
き壓力と奔出力とを感じるのであります。私の魂は、何等障
礙せらるゝ處なく、泉の如く、空氣の如く、總てに瀰蔓し總てに
充滿するのであります。私等の生命を無限に生長せしむる
寂寥、私等の生命を無極に結び合す寂寥、私の進展の確かなる
一筋道である寂寥、私の魂の平和と自由との境である寂寥。
私は、私のよき事の總てに冠らせる事の出来る寥寂を思ふて、
思ひたへられぬのであります。

寂寥よ。寂寥よ。まことに私は、こゝに住しこゝに衣食す
るものゝ一人であります。

忠次郎君

私は、草木を生育せしむる太陽の如く、深き愛深き慈しみに満ちた、あなたとあなたのお母さんの只二人してある一日を思ひます。そこには、雨の日も風の日も、或は雪降る日も烈日の下にある日も、私は、人間の魂に満ちた家、光りの家、永遠の寂寥を通して喜悅に輝ける家を見るのであります。

あなたは、あなたのお母さんから、全身を傾倒した愛をうけられる時、あなたは漲る愛の中に、あなた自身が衆人に致すべき愛の喜悅を覺えたであります。寶石のやうな喜悅、光明のやうな喜悅、渚をあらふ波のやうな喜悅、山々の樹木を訪るゝ風のやうな喜悅、私はそれらのあらゆる喜悅を理解し得る一人であつたのをよろこびと致します。そしてあなたは、今こ

の喜悅を萬人に致すべき機會に接して居ります。私はこれを祝福せず居らるゝでありませうか。

寂寥の家よ、そこにあなたは住し、そこにあなたはうたふて居ります。あなたのうたふよるこびのうたは、何人の心にも鳴り響いて止まぬであります。あなたのまことの心は、人の心に觸れずには居られぬであります。

私は、あなたによろこびと同じやうな、人々によろこびを、私自身によろこびを述べるに専らで、あなたの道をすゝむる雄しさを、精進を云ひ残してはなりません。私の魂は雄々しさをこのみます。私の魂は不撓不屈を稱へます。私の精神は勇敢であらうと致します。私の心の働きは岩をも徹さうと致します。私は、私の心の奥底にある雄々しさによつて、あ

なたと眞向きに語り合ふ事が出来ます。あなたは雄々しさをもつてものを貫きます。あなたは雄々しさをもつてものを結び合はせました。あなたはこの雄々しさをもつてものみな心に、はてしらぬよろこびの聲を上げさせました。

寂寥よ。寂寥よ。寂寥を語り得る人にして、はじめてものみな矛盾と、紛亂と、錯雜を撤し、ものゝ存在に不可思議の光明を認める事が出来るであります。あるがまゝのものゝ存在は、永久の寂寥を心として、はじめてよろこびに轉回し得ました。

寂寥よ。寂寥によつてかゝげられたる幕の奥には、不斷不變の光明が、隈もなく、てらし渡つて居ります。

忠次郎君

寂寥の家にあつて寂寥をうたふあなた。あなたによろこびの聲は、人體にしみわたる香高き香料の如く、人々の心を和げ、人々の心を美しき世界に誘くであります。人々はあなたのようによつても、ものゝ存在を再び新たにし、再び正しく知る事が出来るであります。

忠次郎君

寂寥の家の扉は、今まさに開かれんとして居ります。人々は寂寥の家に入つて、心によろこびを知るであります。人は諸手を高くあげ、寂寥の家に跡絶えなき泉の響を聞くであります。人々の家、それはまことに寂寥の家であります。人々の家、それはまことに幸福よきことの家であります。

忠次郎君

あなたの詩集は、あなたの魂のまことの聲を鳴り響かすで
ありませう。そして私は、このよきをりに、私の思ふ一端をの
べ得た事を光榮と致すものであります。あなたがよろこび
の聲を再びする時、人々は美しき世界、正しき世界を再びする
であります。あなたの上き事の總てを人々に致すの時、あ
なたは祝福されるであります。あなたの上るこびの日、あ
なたの祝福さるゝの日、それは今であります。そして無窮で
あります。

寂寥の家、私は今それを思ふて、心の上るこび躍るのを禁じ
得ませぬ。

大正七年十月八日

遠藤清平

序

寂寥の家一卷、すべて黒田君の産果を盛る

寂寥の家の中には俳句もある。詩もある。すばらしいも
のもあらう。また稚いものもあらう。

けれども、それはすべて寂寥の家の所有であらねばならな
い。

まして黒田君は若い、若さはもろくのもの、輝き出すべ
き時。

戀も愛も肉身も兄弟も路傍の仔犬も水の邊の一本の柳の
木も火も水も風も雪も春風も新緑も鉦の音のやうな秋も而

して銀のやうな冬もすべては若さによつて輝き出される。
輝かしいものは若さである。
愛すべきものは若さである。
黒田君が一身の若さを寂寥の家によつて纏めて出した事を、
を、歡ばねばならない。

大正七年十月二日

東都隅田のほとり

荒川吟波識

自序

私は嬉しい。私の詩集が、いよいよ世の中に送り出されるやうになつた。私は漸くこれまでに育つて來た。
詩歌は言葉だ。言葉は道だ。私達人間の靈魂の正しさがこの道を切り拓いてゆく。一言の悲しみは萬人の悲しみ、一言のよろこびは萬人のよろこび、一言の善は萬人の善に到らなければならぬ。斯う固く信じて私は歩いてきた。現在も私のこの心持に變りはない。私はこの信仰を持つて唯歩いてゆくばかりだ。

大正三年の作、枕頭悲語他一篇は私の俳壇に打つて出た序幕とも言つて宜いものである。層雲に掲載したもので、在來の俳句から一步を踏み出した、可成評判の善かつた作である。

大正四年の作、森の木と室内、山路ゆく精靈、窓の風景、夏山靈驗記は、評論と詩、層雲、射手等に発表したもので、愈々私の意を強うするに足るものであつた。殊にその清新な表現は、俳壇の若い人達を喜ばせてゐたと記憶する。

大正五年の作、櫻咲く月、雪景は、射手、燕泥に載せたもので、自由奔放な私の心が極度に高潮してゐるのを思ふ。

大正六年の作は、重に、射手に発表したものを蒐めた。私としては最も得意な時代と言つてもいい。櫻咲く頃、満目の玲瓏、薔薇の花、夏を讚美す等は殊に自信の強いものである。

この幸福な過去から現在に渡つて、私は、唯芽生えのやうに生一本に育つてきた。これからは中々困難である。

然し一切はこれからである。私の性格は、我々の持てる善をして、その善を全からしむると信ずる。私はそれを期して置く。

終りに、諸氏の序文並に装幀に依つて、稚ないこの詩集が立派に飾られたのを深く感謝する。

大正八年四月

黒田忠次郎

目次

大正三年

枕頭悲語……………一六
山上の兔と秋風……………三三

大正四年

森の木と室内……………三七
山路ゆく精靈……………四〇
窓の風景……………四四
柘榴樹下……………五〇
夏山靈驗記……………五四

秋の日の庭園……………三三
 嫁ぎし人に……………六六
 秋風の鎮守祭禮……………七二
 秋風の家……………七九
 斷腸の賦……………八八
 旅情……………九四
 山上の秋風……………九六

大正五年

雪の上の鐘……………一〇一
 冬の日の窓より……………一〇七
 圓窓より……………一一一
 櫻咲く月……………一二三

雪景……………一二九
 木の枝の鴉……………一三二
 桐咲く頃……………一三四
 沈黙の中……………一三六
 母と共にある幸福……………一三一
 秋の日……………一三四
 秋の日の讃唱……………一三五

大正六年

冬の夜の情火……………一三六
 櫻の咲く頃……………一四二
 満目の玲瓏……………一四六
 夏を讚美す……………一四八

寂寥の家

野本吉三郎君よ……………一五二
薔薇の花……………一五三
兼崎地橙孫君よ……………一五六
寂寥の家の終りに……………一五六

枕頭悲語

雪降る夜
病篤き兄の枕頭に侍して

見れば一面の雪にして我に拜むものもなし

手にふるる雪は愛らしく消えゆきけり

病なれば必ず死すといふべからず

兄よねむれるか

鳥よ魚よこの夜兄の眸に落ちて動かすよ

かくて死なば枕頭の薬も氷るべし

粉雪はのぼりのぼり空に死相の數多見ゆ

兄の眸のひとところ深い森よ雪はそこに落ち込む

吹雪がやがて室内の器具に落ちつき合へば

一面に眞青なあたりは海であつた

海はたまたま曙にして

無数の死鱗が腹を見せて私を誘ふ

兄と一言を交したあとは吹雪にとちられたり

しんしんと雪ふれば凍むまで兄の眞顔さよ

見入れば兄の病體

何よりも海の霧のやうにかき消え

夜明けの鶏が鳴き交したり

兄よ冬なればかこの頃音といふ音をきかず

まこと草原に風の風を待つべき兄弟なるかな

しぐれしぐれ

二人の間には夕ぐれの汽車が通る

兄の眸にひとつの燈臺が廻る深夜なり

ガラス戸に夜明けの霧が燃えあがれば

私達兄弟はまことに

日を生む海の金銀の魚であつた

旗振りの旗のひらめく野を行かむ兄よ再びたちてあ
ゆめよ

これやこの淋しき兄に終るべき兄ならずわが眺め入
りにき

山上の兎と秋風

山の上の兎に一日木の葉が散つてゐれば
臨終のやうに私ののが渴く

ひとしきり木の葉が降つて山は夜明け
兎の目元のあかあかと燃ゆ

君泣けば空は青、我の青さの聲を合する

君泣けばひとすぢに木の實落つ

木の實拾ふかな

木を伐るはさびし

まして小山のうへの枯れ木にのぼり

男は終日木を伐りにけり

空の鳥翔り空色に沈む山木かな

身を跳らせば

兩方の耳に大いなる音と力が重なり

たましひは風をきつてゆく

手を觸るれば

はらはらと木の葉の落ちる山の静寂

私は悲しくも蹲まる

見れば一面の焼原にして

立てるは木々

頬白のこゑもあらはなり

ひとところ日の射す山に

昨夜の蟲が鳴きまろび

私の下駄は露草を噛むでゆく

わが清浄は野より山よりのぼりてきたる

秋風が鳴る木の下に嬰兒となつて目をあくる

鳥もさみしいか、ことごとく我が見る目去るかな

山は夜に入つて私と木との對座に言葉が見ゆる

森の木と室内

木は木だ

散るだけ散つて葉をひびかせよ

森の木にたましひそびえ

森の木の葉は乾きたり

森の木に

私の全身を訴ふれば

冬の日のけむれるなかに

落葉はしきりなり

冬の空はいちめん

森の木梢をあつめ

あらはな梢に小鳥をくばり

私は日光にみちてさけびをあぐ

あらしを隔てて

室内は赤い布れのみ見ゆ

室内の柱は家屋をぬきさうである

冬の夜のあらし

冬の風

一面の庭園には鳥のよる光りだになし

山かげの河原に蟲や啼き絶えし

この冬の夜のみづのこときに

冬の夜の瓶子ささぐる母の子の瓶子の水は冷えま
さりけむ

山路ゆく精霊

わがあしをとの山路に入れば
はや

ほのぼのと咲くさくら

さくらさくら

まして友呼ぶ山の小鳥は眼に近し

一面の山の青草をふみしだき
かせくれば

千々に心のみだるかな

手をふれば

かすかにかせのひびきしぬ

この山あひの谷のさくらに

雲雀あがり山の畑に感涙ながす

山の畑の菜の花の盛り見つつ喘ぐかな

草の上にて数うれば

鶯の鳴くこゑはひとつにしてさびし

木の芽光りさす山路にして

鳴くはうぐひす

行くは人

こんこんと湧くはさびしさ

木の芽光りわがこころ雲をよびさわぐかな

春の山にのぼれば

春の雲四方にありけり

春の山の明るさや

てにとりて散るは蓮華草

櫻咲き、四月八日の甘茶を汲めば、亡き兄のまして偲ばるゝ

兄よ兄よ

わがさびしさも年あまり

四月の櫻咲きいでにけり

父の墓

兄の墓さへ古りければ

わがはらからも

生ひたちにはけり

窓の風景

ふるさとにて

ふねにのりて

とほくふるさとのうみにいづれば

かせはたえ

かひのおと

なみにいり

わがこゝろはなたれてきはまりなし

ふるさとに

ひらひらと春風ふけば

音無川ひとすぢに流れあつまり

そのかみの母のことばをのこせども

わがみなかみのはるけさよ

ふるさとのやまの

あけぼのあをあと

なつきにけらしははとゆびさす

ゆびさきに

ながるるかせのひびきさへ

あはれさみしくきえゆくものを

ふるさとの

やまのおもとのおそぎくら

はやちりそめぬ

ははとゆびさし

母とゆびさし

河原をよぎり

あやまちし

青き石など拾ふさみしさ

曙の山の青さ押しかへすかな

うぐひす

うぐひす

わが身のまはりのふるさとの山

ふるさとの

小山の上の青銅の鐘

うてばひびき

うてばひびき

風にめぐるはかたはらのさくら草

ふるさとの家々立ち春の夕べの煙たつ

家の豊に手を置いてきけば雲雀かな

春の水を涉れども、涉れども

いづこまでもさびしきは鴉

海

青き浪見て他愛なく泳ぐかな

泳ぐ波間より見ゆるはふるさと

友呼び交はし泳ぐ浪のふるさと

浪にのりて身はわう、こんのひゞきをつくる

わが目にあふるる海の青波うつかな

濱の砂に我ひとりかげり、鳴るは海

濱の砂貝一念に拾ふをゆるさず

かたはらに遊ぶわらはべのいとけなさにも

ひたすらにわが年月をおもひ

なみださへいづるなり

柘榴樹下

柘榴の葉ひるがへりやます花をもつ

この掌に動く羽蟻をいかにすべし

夏の朝なれば布く草の青さ搏ちきたる

椅子のまはりに湧きいづる暗の螢かな

月まろくいづればありがたや木の梢

木の下の盥の水あかるくも月いづ

わが淋しさや月は山をてらしいづ

庭前の初夏

これやこの

ひらかむとする木の花の

ゆるぎも見えず

しづくみどり葉

あやめのはな

水にうつりてうすうすと
にほひ咲ければ
消ゆるさざなみ

母のこゑ

しづかにわれをさますなり
まくらべちかく
夜明けぬるかな

あやめのはな
ひかりいづれば夕かけて
ことに淋しや青簾のかげは

母よ母よ

わがはらからの生ひたちし
庭べのあやめひかりかがやく

夏山靈驗記

この一篇を碧梧桐氏におくる

1

山のいただきに
光れるくもを見てあれば
くもはながれて
かへりこず

2

山のおもとの
みなかみに

3

掬ぶうつはのかげさせど
水はひびきてとどまらず
ながるるみづと
ゆくくもと
風もさそはぬ草に似て
われはさびしく
のこるなり。

見よ

梢にはからすとまりて
曙を染め

緑葉はしたたるちから。

われら

いよいよ合唱すれば

もろもろのこゑ雲にうつりて

かたちをつくり

渺々とながる。

かせきたりて

木の葉を落し

地上に限りなき光りと音と

錯綜し

透明にはしる。

いまはじめて

をかしがたきものはせまり
とどろきわたり
たましひかがやき
梢には
無数の瞳集まりてうごかず。

旅にて

松明を

みづに投ぐればほのぼのと

夜明くるやまの

ちちろすゝむし

すずむしのこゑさへ

われをおどろかす

山路に入りて病めるがことし

すすむしのなくくさむらにかせたちて

日ははや

われをいそがしむるかな

てにとりし

夏の落葉のかれがれに

捨つべきか

あはれ日にひかるなり

山の上の

草しきぬればかせきこゆ

さがみの浦に波よする見ゆ

山のうへに

ゆくもかへるもさびしきは

みちしるべたつ

おほぞらのもと

山の木に光り消えゆき

さらさらと

かせは木の間に暮れかかりけり

山のかたち

へだたりければうす青の

空にこころを

のこしてかへる

山よりかへり

わがさ庭べのけしの花

つりがね草は山に捨てにき

夏の山の雲のかがやき目にあまりたり

泥色の魚泳ぐ山清水にて日暮らしぬ

清水ながるる涉れば脚にながるかな

山頂の草の中に鳥しづみたる淋しさ
目をとづ

草を刈る女を見つつうなだれしかな

山は入り日

山を下るに木々の枝懷きてやまず

山を下る、山の上の入日は消ゆる

秋の日の庭園

はぎの花に

秋はあさの

かせうさき

露ことごとくみだれたる

はぎ

桔梗

いささかの雨にぬれにけり

草の花かしてにひらき
わがおもひここにあふる
まして

秋のあかつきなれば

鳳仙花ぐれなるなれば

人のこころ

ひらひらと燃ゆ

秋の鳥きたりて

しづかに庭園の木の梢に下りたり

色錆びたる鳥なり

啼かぬ鳥なり

そそりたつ梢のはてに
そびえゆくは
わがこころのほのほ
ものの音絶えし
あかつきなれば堪へがたし

嫁 ぎ し 人 じ

君ははや人妻となりおほせたり
かくおもひつつ
きみをしのばむ

きみはそも

あだし男とはだふれて

伊勢路に入るとききしさびしさ

くろかみの

ながきがゆるゑにかなしむと
いひしあはれの
終へにしや君

いまははた
をとこをみなとたづさへて
入り日の前にたはむれてあらむ

伊勢の海の

入り日さびしと汝がかひな
のべなばのべむ
つよきをとこも

蟲のねに枕冷たふなりにけり
秋の夜いたく
更けにけらしな

ふるさとの山

見あぐれば月まろく空にかかり
そびゆるはふるさとのやま
あをあをと月さすところ
やまの中腹に
雉子が鳴きたち
わがもちてたてる洋傘の銀

うすうすと鳴る

山々にかこまれたれば

ふるさととはさびしき小村

草の花さき

秋の水ながれ

家々の煙り立つ夕ぐれといへば

少年がふき鳴らす笛の音さへ

あはれにこころしぼらるる

汽車の窓に

木より木の夕日を眺め

夕日にめぐる小家をしたひ
こころはとほく
かすみゆくふるさとの山に
ゆきてかへらず

千萬の蟲のこゑに

秋の山はしづかに湧き

われはわが

さびしき影を追へどはなれず

草原に鳴く蟲のこゑ數へきれぬかな

月光流れ蟲とわれおどろき合へるかな

月光草に燃え草にて鳴ける秋の蟲

かなかなが鳴きしきる一本の木の夕日

犬がしげしげと私を見てゐる、犬もさびしいか

山の上の兎の耳さへ秋の風にそびゆ

秋風の鎮守祭禮

笛太鼓

ことごとく森の葉をふるひ立たしめ

あつまり立てる人のこころ

童子となつて連りければ

秋のかせふく

おかぐら堂に

日本武の尊こそ剣をぬき

みるみる

熊襲武を斬り伏せたり

まことに人の心童子となつて連り
限りなきよるこびに
時を忘るる

ひとむらの

あきつながらる森かげの

さびしき小屋の

神樂笛かな

かぐら笛

ききつつひと日さまよへば

むかしを今になすべかりけり

ほそぼそとわが家のけむりたちのぼる
祭りの町の入り日そらかな

はなすすき

秋の祭りの花山車の

しりへに散ればさびしきけしき

さびしきは

秋の祭りの花山車の

花の中なる濱桔梗かな

しろがねの月が
お前と私の杯をいつばいにした
いつまでかうして捧げてはゐられない
私の腕はしびれてきた
時間と一緒にお前のかよわいかひなの細つたやうに
私達二人はもう杯をのみほさなければいけなくなつ
た

しろがねの月が落ちる前に

神樂笛がとこしへにとどまるまへに

この

私達の杯が土の背に落ちて碎けるまへに。

以下六首

妻をむかへたる友江尻におくる

母のまへ

はなやかながら生ひたちし
乙女を君のいかがしにけむ

君が閨

くらくともりてあるべきか
秋草つゆのしづく夜すがら

あめつちに

ただひとりなる乙女子の

小鳥のくちをはぐくみたまへ

君はまた

覺めてさ青のとばりより
妻がねむりのしづけさか
見む

ねやのうち

妻のねむりのふかぶかと
たよりもあらず君や覺むらむ

友といふ友をはなれて

君はひとり
ひとりの妻におぼれゆきけり

秋風の家

をりをり

秋のかせは私に刃やいばを見せる

秋のかせふくるところに

きらめくは刃

身をかはし身をかはし

行くは人

山々の

雲のきれめに見る空の
青々ふかみ秋はきにけり

山々に

秋かせひかり流れゐて

この村人のしづかなる日々

うちわたす

しなのの山にふかぶかと

あさぎりながれ

ながれたえすも

そのかみの戀人と逍遙す

秋のかせ

きみがくろかみなぶるとも

いまはや君のわれにはあらず

ひとむらの

すすきをめぐるあきかせに

君がくろかみみだれがちなる

ひとむらのすすきのかげの

をみなめし

手をらばをれむ

君なりしかな

とり交はず

きみがかひなのまろくやせ

秋の林はかれがれさわぐ

君とゆく

秋山ながら日のさせば

ひよどりさへも鳴きつれにけり

君が置くかるきかひなに

あきぐさは

しづかになびき
伏すべかりけり

戀ひわたる

君がかひなをまへにして

わが立ちぬれぬ

秋のみどりに

おまへを前にして

私はいま

忘れはてた数多いひとつひとつを取り返へす

おまへのぐち

おまへの、くろかみ
おまへの、日の下の蛇のやうな腕
おまへの、波のやうにゆりよせてくる肉體
おまへの、冷たく燃えてゐる情欲
さうして時は何よりも
おまへの、目元をさびしくくもらせた
形ではない
おまへの、無限
影ではない
わたくしの、無限
目に見えない貴いものが
私とおまへの谷あひに

生ま生まと積つてゐる。

おまへと行く露の野のみだるるさま

女郎花

かせに吹かるる淋しさは

そこに行く

おまへのすがた

燈火抄

病弟哀譜

天の川暗きわが家にかかりけり

天の川ながるる下に人なやむ

天の川見ゆ、弟よ出でて歩まむ

弟よ聞こゆや秋の夜半の水の音

弟よ日を見ずやこの霧の中の

弟の日を見るかはやも眠るなり

弟の手をのべて摘みし菊枯れ葉

弟の病ひ柿もらふ秋となりけり

弟が下駄はいて出づや渡り鳥

鶉が鳴き、日がくれ、弟ねむる

庭の石につまづき見るや鶏頭花

天の川見ゆると障子ひらきやる

斷腸の賦

愛弟の新らしき墓前に供ふ

弟よ

いづこにゆきし

この古き家にして

汝がのこしたる

ひとりの母

汝がのこしたる

積年の書物

汝がのこしたる

學校の制帽

ことごとく

力足らざりしこの兄の前に

なげき蒼ざめたり

弟よいづこにゆきし

ひとりなる母

ひとりなる兄

ひとりなる姉

朝は朝の

仕事はげしければ

夜は夜の

なりはひに驅られ

汝が

白き位牌のまへに

手を合はす言葉

まことにすくなけれど

我等を去りし

行衛の空

斷腸の思ひに戀はるるなり

弟よいづこにゆきし

さびしくも

生き残りたる兄は

しばらく

もろかりし汝が一生の

さびしさを

身一つに新らたにせむ

弟よ

汝が悪業の遂に亡びたれば

清淨なり

我がこころ

正しきに迷ふ一切の外に

汝は清淨なり

光風霽月我をめぐりてゆたかなれども

わが悪業日につのりて
苦るし
弟よいづこにゆきし

挽歌五首

いかに呼べど湖をたたへてふかふかと
眸うをかすなりにけるかな

ただひとり

老いたる母は

なきがらを

呼びさますべく傍をはなれず

秋雨に柩しづしづかきいだす

街の青砂利ぬれ渡るかも

とこしへにすこやかにあり得べきやと
みづからに問ひされど慰さます

弟の死室をいでて

家のうち

わが坐さだまらずさまよひにけり

旅 情

鳩呼べば柳散る中をあゆみくる

見るものもなく山の家にて買ふ林檎

林檎の青さ空の青さや冬の晝

林檎の膚、日の中に輝くなり

はるばると見据ゑし麓冬田かな

わが前に木を落つ葉ありひるがへる

冬の日の下、もろもろの形をたゞす

落葉ひるがへり、冬の日の中に銀杏燃ゆ

小鳥まろく冬の日のかせは枝の上

冬は朝、梢よりはしるこゑ

冬の朝なれば、魚の鱗は黄金を鳴らす

山上の秋風

合掌す

わが細き指さきに

空のしらくもなびきあつまり

ことばなきいのりのところ

天かけるかな

あきのかせ草をはらひ

梢をめぐり

人里はなれしひとつ家の鳩をなかしめ

年若いし人は目を伏せて長く
年若きまろうどと共に
口をつぐみたり

あきのかせ吹くひとつ家なれば

綿よりも白き小鳩は

まことにさびしく

向ひの山を見るなり

むかひの山には萩の花が

みだれかかる

萩の花のちりはふを見れば

かせにながれ
秋の水に落ちて流るる

しろがねの鳩

まろくうをかぬひとつ家に

山の入り日の照りわたるかな

はぎ桔梗みな

丈のびてうらがれたれば

秋のかせにおぼるるは

しろがねの鳩

くらきひとつ家

山の水はさびしきものをうつしてながる

山のみづ

そらをたたへてながるれば

あからさまなる秋のひとつ家

鳩なけば

くらき家内やぬちのかまどより

いとどさびしく

鳴きかへすかな

灯をともしせど

山守は淋しき膝を崩さず

鳳仙花ちりたり

山守よ眺めしや

山守と坐して

はや山山の入り日かな

雪の上の鐘及び鳩

雪の上にひびく鐘消ゆるを惜しむ

鳴るは鐘、雪の上に日の出も近し

母の目にもわが目にも野山の雪

満目の雪のまへにして母と子とあり

母と子のひとつ家にして戸さす雪

人の眠りおだやかにすすみ夜半の雪

雪降りいでぬわが眠る家の外の雪

木の枝に觸れ家の戸にふれ雪ふりいづ

雪の日の雪の上にて鳴くは鳩

池の水に消ゆる雪雪吹きけふる

鳩に豆やる雪の上に日のさしたれば

豆くふ鳩のくびの可愛ゆさ雪夕日

豆を喰つてしまつて

まへよりも淋しい

雪のうへの鳩

雪の上に

山からの夕日がさせば

雪の上に小さなあしあとをのこして

御堂の家根にかへる鳩

それからは

日がくれるばかり

鳩よ鳩よいかによき日のめぐるともこのわかうどを
忘るるなかれ

豆やると我が手にしたる豆箱の上に下りたち鳴ける
鳩なり

黒き鳩白き小鳩もうちまぢり豆くふさまを夕日てら
しいづ

豆喰ひてやがてさびしき世を啼けるあはれ夕日に身

を染むる鳩

鳩啼けばくらきこころにうすうすとわらべのまなこ
ひらくこちす

豆箱のむなしくなりし傍らにわれ立ちてあり鳩なき
てあり

曉はさびし

まして雪降りやみし雪の上に
死したる鳩は瞳をとどめ
うすうすと人を見るなり

まろくはりたる胸のおもて
昨夜のゆめを人にかたれど
人はなすすべを知らず
まことに
足をとどむれど
人はなすすべを知らず

冬の日窓より

窓ひらく、山山わたる鳥もなし
窓ひらく、日の下に草枯るるなり
窓を押しひらいて視る、清浄たり
風吹く方へ靡く枯れ草見つつある
草も枯れたり、家のまはり風吹く

枯れ草を手に置き風にとられけり

草焚いて顔あつめたり、燃えあがる

ひしひしと草枯れかかる中の家

枯れ草の中の手にふるるかぜ

枯れ草の靡きつつ山のいり日かな

日が落ちる、日が落ちる池のみづ

池の汀の夕かけてしるきこがらし

冬夜

母とある室内の茶菓や夜あらしす

茶菓はわがほしいままにして夜のあらし

海のふえあらしの中に鳴りいづる

母もききつやあらしの中の海の汽笛ふえ

正月夜話

母も花合はせにひとときは餘念なし

盃を置いてきく冬の夜の水の音

妹のくろかみがふさふさと垂るる雙六

雙六に母もまじりていとたのし

圓窓より

木の芽暗くなりゆく鐘を數うる

風にふれ小鳥にふれ木の芽萌ゆる

小鳥の足にはやひそくと萌ゆる草

草萌ゆる草もゆこのまゝにあるべきかわれ

草萌ゆるあはれはるかなる家根の草萌ゆる

野より山より光りうちきたりこゑあぐる

櫻咲く月

山路

朧るなり谷の水くむ人が見ゆ

きけばはるばるや谷うぐひす鳴く

うぐひすに山ふかふかと緑り籠む

春の山の月こそよけれ瀧も鳴る

水を渉るに鶯のこゑは身に近し

うぐひすうぐひすわがかざせるは櫻かな

櫻の枝を水に捨つ水青くながる

林に入り手をうちて歌ふべきか鶯

鳥は青玉人は黄金燃ゆるは緑り

人の聲す緑りのなかほのぼのと聲す

山は母今しははにわかるゝ

海濱

夕日の前おそろしき渚のわがかけ

波路けぶれるにあはれ春の島浮く

船よ船よ波はるかなるひとつの船

春かせ吹けよ帆あぐる船が目近し

わが家

吹けよ春風童べの涙ふいてやる

吹けよ春かせ野菜畑に母が見ゆ

夕煙りのぼりはや蒼ざめし人と家

憐れの小犬わが家に馴れし櫻かな

夕櫻折るべきにあらず香ぐはしゝ

あけぼのや母のこゑす鶯のこゑす

鶯が鳴きしきるなり見れば鶯見ゆ

窓より春の山見ゆそのかみの母の顔に見ゆ

山の上

山の上の

一本のさくらは夕かせに溺るゝなり

さくらの下の白き兎は

ゆふ月に目を合はすなり

人は傍らにありてさびし

雪 景

はるかなる三野彌吉兄へ

山の雪見ゆあゝはるかなるしらゆき

雪の山の明るさや手にとれば消ゆる雪

能登の國のしらゆきにきみも祈れるか

雪にうたれ雪の中能登の海見ゆ

海のうちへ雪ふればゆりあぐる浪

まして雪ふれば能登の青海は目に近し

木の枝の鴉

木の枝の鴉みづにうつるなり夏の花

水を涉りつゝほそき青葉を笛にしぬ

竹林に夕日あつまり鳥騒ぐ見ゆ

をさな兒と芽生えをさがす野のみどり

手にせる芽生え淋しく見つゝ歸るなり

草と人いり日に染まり水さへあかし

我が家見ゆとをさな兒は駈けいでしかな

蛙さへ鳴いて野遊びの歸路となりぬ

野山を讚へよこゝろみどりに溺るゝ

若葉かせにふねはしるみづのうへ

星を數うればひとつく悲しみいづ

春の夜の暴風のなかのつきと星

さくらく夕の山みづ家をうつす

をさな兒手をうちさゞなみに咲くあやめかな

桐咲く頃

人のひるねおだやかにして桐咲ける

桐咲いてものゝあかるさ人によす

風薫る池のさざなみ絶えざるよ

風薫り赤き木の花咲きめぐる

母のこゑす夕かけて茄子の花散るかな

蟲鳴いて短夜のはやうす青し

清水鳴る水のほとりに立ちぬれぬ

合歡の花散りけるかはや水の上

水の上流るゝ花をすくふべし

沈黙の中

月いでゝあはれ鈴蟲鳴くことよ

ちゝろ蟲鳴きくゝて月の大きさをよ

月の面をうすぐも流れ流るゝよ

月光のながるゝところすぐる船

木々の葉の秋かや空にひゞく銀

銀の鈴うち鳴らし空や秋くるか

銀鈴の音しづかに起こり秋の川

夕の鐘、蜻蛉あきつの群れはみづの上に

愛弟の一週忌の秋

きりぎりすわが家は暗しきりぎりす

去年の今頃の生きてゐた弟の顔

弟をいづこにやりしきりぎりす

淋しさや弟をかへせきりぎりす

弟よ夕べの鳥となりて來よ

今日よりは夕べの鳥を皆愛す

見かへれば母の熟睡きりぎりす

水の音きりぎりす母の熟睡

K.Y. 子におくる

君が手は短かしく果樹の下

天かける鳥の涙を見しや君

あゝ日はくれて置きものゝ如く君暗し

手にふれて君が黒髪香ぐはしく

曉は白し君のねむりのしづけさに

君が笑ひ秋草の光りをみだし

君が涙、秋草の色をしたがふ
あゝ君がすぐれたる智慧をもつて二つに一を選むべ
し

深夜

床下に螻の鳴くさへ夜は深し

鳴きいづるあはれの蟲の深夜かな

傍らの母の眠りを見て居りぬ

母と共にある幸福

はるかなる三野兄へ

あかつきの鐘鳴り渡り母を覺ますかな

母のことば

吾子よとく起きいで、蓮の花の開くを見よや

子のいらへ

曉はさびし一瞬にしてひらく白蓮

母

よろこびはゆきぬ蓮の花破れたりはや

子

悲しみは數を増しぬ蓮華よりはしるこゑ

母と子

有明けの月や母と子は露にぬれにけり

×

霧の中の朝顔のまへのはゝのこゑ

霧の中の羊に朝の日のさしいづる

霧の中の母、羊の顔と並び見ゆ

母の立ち居夕かけてさびし茄子の花

秋の日

秋の日の鳥聲身につきてはなれず

秋風の道の邊の草が觸るるよ

觸るる草の花の白さ空の月の白さ

室内の器具さへ眼を閉ぢて暗し秋の夜更けに

秋の日の讃

秋かせや烏瓜は一點の朱を灯す

今朝の秋の家々の煙りゆたかなり

秋のかせや木々は溺れて葉を散らす

秋の日や横はる森に著く鴉

鳥のこゑおだやかにして秋の日よ

横はる森にああさんらんと濺ぐ黄金

手にしたる一枚の秋の葉は捨てがたし

秋ぐさのなやみ人にのりくるまひるかな

森の葉がそよぐよさればか鴉が鳴くよ

秋の森一羽の鳥の揺れあがる

山茶花は蜂を誘ひまた淋しくも散り

蘭の葉は雨をよるこびていや青し

木々は夕ぐれの葉を收め星一つさしのぞく

星のひかりしとしとと涙する樹あり

水の上に山よりの夕日さし鴉の聲

日は西に鴉の聲は人をいそがしむ

冬の夜の情火

空の月あはれたちまちにして雲に没す

雲に入りし月の光りかやなほ梢に見ゆ

梢は月を誘ひまた星を誘ひてうれし

月の下まして木々は觸れがたく光り

月の光りに見れば木々は可愛ゆし手を擧ぐる

水の音をきかずや冬の夜のこの水の音

冬の夜の水の音は冬の夜を領したり

冬の夜の水の音夢にさへはなれぬものを

母のこゑか目覺むれば冬の夜の水の音

以下

父君の喪に籠れる清平兄に

この冬の君の眼鏡のさびしく曇らむ

うつし世の父君ぞ眼鏡にのこりてあらむか

君が一生の幸福を父君に謝すべき時なり

君の淋しさか我のさびしさかこの淋しさは

正月二日といふに早朝雪深し

父戀しととく起きてあらむかこの雪の朝

父君を送りたる君の孝人の世に比ひなし

君が父君今も將棋と遊べるごとし

君と見て泣かば泣くべしこの淋しさに

正月

風よりもさびしく正月の日のすぎゆくよ

正月なればか橙の色をさへ愛す

櫻の咲く頃

櫻咲く、まことや春の空の青

春の日の窓をひらけば櫻見ゆ

啼けど啼けど鶯はさびしき小鳥

啼き啼きて鶯は啼きやみにける

鶯はいづこにゆきし鳴きやみにけり

野にふせば青き草にてつゝまれぬ

遠天の雲に入る鳥よ雲はしろし

山のいたゞきに迷へる雲かいと白し

春の白雲四方にありて流れけり

春の樹立夕雨に濡れにぞぬるゝ

雨に濡るゝ、一重櫻はさびしきものを

櫻の下、睫毛にふるゝかせありけり

S子におくる歌一首

閃くは君が心の白刃にや光るとみえてまた見ざりけり

愛兒を喪へる和田君におくる挽歌五首

捉ふべき影さへあらず幼な兒は風の如くも天去りにけり

幼な兒は小鳥の如く歌うたひ天そらにあそぶやこの春の

日に

愛し子の今日も門邊に立つ如し澁谷の町の青きゆふぐれ

黒髪のおさふさとして遊びぬし吾が兒かへらずなりにけるかな

櫻咲くまこと都は春なれや吾兒が墓さへかげろふて見ゆ

満目の玲瓏

我等月に謝すべしこの満目の玲瓏

春の月おだやかにひかりをくばり

木の梢かすかに揺れあかすかに揺れ

散るさくらひらひらと風にのりてさびし

春の草光りつゝ摘めばさびしけれ

野の草は摘むべきにあらず玲瓏たり

春の日やあはれ草にさへ戯れあそぶ

母も寝るこの春の夜のかすみつゝ

父君を喪へる一碧樓に

鶯かたましひのこゑか聞ゆるは

夏を讚美す

五月の樹木あざやかに青くありがたし

五月の樹木枝を交はしてたのしけれ

夏の海の上鳥一羽放たれたり

夏の海の上一羽の鳥はいと小さし

夏の海の波ゆりあがりゆりあがり見ゆ

烈日に蔽はれたる海や一羽の鳥

烈日の空に雲いよいよむらがり

人の上はるかにして烈日の白雲

烈日の白雲はひらひらと絹をのべたり

夏の夕べ、蘭の葉の縞の美しくく

夕ぐれといへば雲青し蘭の葉も青し

われまさに地に立ちてあり地はあたたかし

地にありて祈る言葉なし渺々として空

蘭の葉の青さ夕雲の青さ感涙しきりなり

風に吹かるる蘭の葉はまさしく光り

夏の夜の月はのぼりぬ比ひなきひかり

野本吉三郎君よ

九月十一日のわが東京は秋の雨

秋雨に濡れ渡れば街は淋しき夕べの青

西天下茶屋秋風白く吹くらむかはや

秋風の西天下茶屋にして君も淋しきや

薔薇の花

薔薇の花に微かなれどはなれざる光り

薔薇一輪のまづしき花のはぢらうさま

月光におぼるゝは一輪の赤き薔薇の花

薔薇の花唇をひらくうすくれなる

□

櫻の實地に落ちてあり地は涼風

鳩呼べばさびしく鳴きぬ夏夕べ

樹の小鳥かがやき鳴くや麥の秋

蘭の葉はかせに溺れてうちさわぐ

夏の夕べさびしくうす青きかな

□

樹のほとり雀ついはむあさぼらけ

そのまろきからだをささへ雀の脚

雀の脚ほそく可愛ゆく地をとべる

羽ばたいて雀は枝にとまりたり朝

枝の雀の小頸かしげたるあはれさ

□

朝顔の花に朝はうれしき齒をみかく

母と子とながむればうれし朝顔の花

朝顔のまへ母のたのしくしづかなる顔

ありあけの月をいたゞき朝顔の花

兼崎地橙孫君よ

十月二十一日終日曇りて淋し

君が住む京の秋風吹き來たるらし

君が住む京は西方秋入り日

てのひらの色さへ白し秋の風

たちいで、見ゆる萱山飛鳥かな

赤く淋しく秋の夕日や照り渡る

秋の曇りの鳥ひそかなる地上かな

人のこゑいんいんとひゞく秋の夕

草と人もろともに秋となりにけり

寂寥の家の終りに

お父さん

あなたが、お母さんと私達四人の子をお遺しになつて、お墓へ行かれてしまつてから、もう十七年の月日が経ちました。死ぬものは死に、育つものは育ちました。

私は今、お母さんと一緒にかうして生きてゐる幸福を思ふにつけても、思ひ出さるゝのは、兄と弟の死とであります、お父さんが亡くなられてから、家計の困難は一通りではなかつたやうです。私は子供心にそれを悟つてゐました。女中がゐなくなつたり、お母さんの暗い顔は、私達子供の心にも不幸の

影を日々に濃くしてゆきました。この間に立つてお母さんの努力は立派なものでした。私はこれを私の家の永久の誇りとして、感謝してゐます。お母さんは、私達の知らない中に起きて、又私達の知らない時に寝られました。私達兄弟は、お母さんの睡眠を知りませんでした。女一人で一家の經濟を立て、ゆくのは仲々です。お母さんは、子供達を育てる事に夢中だつたのです。

私達はかうしてだん／＼成人してゆきました。お母さんの骨折りは無駄ではありませんでした。私達兄弟は悉く優等の成績で小學を終へました。悲惨な家にも希望の光りがさしてきました。併し、お母さんを扶けるために、私達兄弟は優秀な素質を持ちながら學業を捨てなければなりません。

した。それ故、兄弟三人はそれぞれの職業に就き、妹はお母さんの傍で教養をうけてゐました。

かうして、しばらくは何事もなく、幸福に似た月日が過ぎました。私の家も、だん／＼と盛り返してゆきました。そして、これからといふ瀬戸際でした。不幸は再び暴風のやうに襲つて來ました、兄が死に、年を逐ふて又弟が死んでしまひました。私はもう、がっかりしてしまひました。兄もどんなにか残念だつたでせう。がどうする事も出来ません。兄は不幸な短い一生を終へました。お父さんの歿後長男である兄は、私達よりも一層苦勞をしたに違ひありません。その苦勞の實を結ばない中に、死んでしまひました。私は氣の毒でたまりませぬ。それにしても、弟はまだ／＼幸福でした。苦勞

などは知らなかつたでせう。末子としてお母さんの愛を一身に集めてゐました。そして、勞はられ、勞はられ、靜かに死んでゆきました。羨ましいほど幸福に見えました。かうして、兄も弟も死んでしまひました。

お父さん

こんな悲慘な空氣の中に育ちながらも、私は丈夫で、月日を重ねてゆきました。今ではもう一家を支へるに事を缺くやうな事はありませぬ。御安心下さい。

お父さん

私は、お父さんを思ひだすことが、殆ど無いと言つて宜い位です。不孝な子です。お父さんと一緒に御飯を食べたその幼かつた短い年月は、私の記憶に残ることも無い位です。私の

記憶はあまりに漠然としてゐます。それでも私の心は、ともするとお父さんをしきりに慕つてゆきます。折にふれて浮び出るこの愛慕の情が、私の肉體に亡びないである事を、無上の幸福としてゐます。私とお父さんとの情は、かうして、折にふれて燃えあがります。私は獨りでその幸福を味つてゐます。

お父さん

妹は、もう嫁にやりました。私のしなければならない責任は、どうにかかうにか果せるやうになりました。もう大丈夫です。お父さんも草葉の蔭で、長い間どんなにか私達の事を御心配下すつたでせう。けれども、もう大丈夫です。これから私の家は輝くばかりです。

お父さん

かういふ淋しい家に生まれた私は、いつとなく詩に親しんでゆきました。切ない私の心の、それは、かくれ家でありました。いつでも私は、その、かくれ家に籠つて淋しさに弱れることを喜ぶやうになりました。そこからは、善い言葉が生まれるのでした。私の持つてゐるありとある善、ありとある美しさは、皆そこから生まれるのです。そして、唯、私は感謝の涙にくれてゐます。

お父さん

喜んで下さい。私の詩も、だんく、世間の人が見てくれるやうになりました。正しいものは、自然に、正しい人によつて選ばれるのです。私もこれから、愈々信仰をもち、智慧を磨き、

教養を積んで、人間らしい人間にならなくてはなりません。

お父さん

喜んで下さい。私も詩集を出す程になりました。この一卷をついでしんでお父さんにさし上げます。「寂寥の家は、私の過去五年間の淋しいもの語りであります。今日か明日か、長くて五十年か百年の後には、又懐しいお父さんの傍に行つて、何かと教へて戴く幸福を夢みてゐます。

お父さん

久しぶりで、長々とお話を申し上げました。私の集を公やけにするに當りまして、圖らずもお父さんに邂逅した喜びでもう私は十分であります。お母さんもこの集を愛讀して下さい。私と信じます。私はせつせと働きます。

大正八年四月

亡父十七回忌法要を終へて

東京赤坂の小舎にて

黒田忠次郎

大正七年五月十四日印刷
大正七年五月二十日發行

發行者兼 黑田忠次郎

印刷人 中島丑之助

印刷所 東京市京橋區宗十郎町十五番地
東京市京橋區宗十郎町十五番地

不許複製

東京市赤坂區仲之町十番地

發行所 俳句の研究社

發賣元 東京神田・東京堂

(定價九拾錢)

俳句の研究出版社版書目

内藤鳴雪氏題句 高濱虚子氏題句
萩原井泉水氏題句 河東碧梧桐氏題句及序

黑田忠次郎氏著

評釋
句撰 現俳壇の人々

菊半函入裝幀極美二五〇頁
定價金七拾五錢 郵稅六錢

荒川吟波氏序 遠藤古原草氏序 黑田忠次郎氏著

句集 現代名句選

菊半三色刷裝幀美
特價 金六拾錢 郵稅四錢

俳句雜誌 俳句の研究

每月一回一日發行定價一部廿錢
社友三ヶ月五十錢 六ヶ月壹圓

主幹 黑田忠次郎

兼崎地橙孫、遠矢良茂、山下政一郎、中澤青麻、
林葉平、喜多村綠郎、河村蟻介、執印南蠻、
荒川吟波、遠藤清平諸氏執筆

187
192

終